

Hesiodus, *Theogonia* 576-7: 二重の冠？

本 城 大 一

ヘーシオドス『神統記』のプロメーテウス・エピソードの一部である 570-84 では、ゼウスの意図に従って、ヘーパイストスが人間に与えられる禍としての女性を作り、さらにアテーナーとヘーパイストス自身が、その女性を装身具で飾る様が語られる。

αὐτίκα δ' ἀντὶ πυρὸς τεύξεν κακὸν ἀνθρώποισι· 570
 γαίης γὰρ σύμπλασσε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
 παρθένῳ αἰδοίῃ ἵκελον Κρονίδεω διὰ βουλᾶς·
 ζῶσε δὲ καὶ κόσμησε θεὰ γλαυκῶπις Ἀθήνη
 ἀργυφὴν ἐσθῆτι· κατὰ κρήθεν δὲ καλύπτρην
 δαιδαλέην χεῖρεσσι κατέσχεθε, θαῦμα ἰδέσθαι· 575
 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
 ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλᾶς Ἀθήνη·
 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην χρυσέην κεφαλῆφιν ἔθηκε,
 τὴν αὐτὸς ποίησε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις 580
 ἀσκήσας παλάμησι, χαριζόμενος Διὶ πατρί.
 τῇ δ' ἔνι δαΐδαλα πολλὰ τετεύχματο, θαῦμα ἰδέσθαι,
 κνώδαλ' ὅσ' ἤπειρος δεινὰ τρέφει ἡδὲ θάλασσα·
 τῶν ὃ γε πόλλ' ἐνέθηκε, χάρις δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄητο,
 θαυμάσια, ζωοῖσιν ἐοικότα φωνήεσσιν. (Hes. *Th.* 570-84)

そしてすぐに、(ゼウスは)人々に火の代わりに禍を作った。 570
 すなわち、名知れ渡る足曲がりの神が、大地から、
 乙女の姿に似た物をつくった、クロノスの子の意のままに。
 そうしてまた、輝ける眼の女神アテーナーは帯を巻き
 白銀の衣服で飾り付けた。そして、頭から巧みに作れる
 覆い布を手で垂れかけさせたが、それは見るも驚くべきもの。 575
 そして、パッラス・アテーナーは、草の花の愛らしい
 青々とした巻き飾りを、彼女の頭の周りに巻き付けた。
 そして、金の冠を、彼は頭の回りにつけた、
 それは、名知れ渡る足曲がりの神が自ら作りしもの。
 その手で、父たるゼウスに気に入られるよう、細工した。 580
 それには、多くの細工が作られていたが、それは見るも驚くべきもの、
 陸や海が養う限りの恐るべき獣たちが彫られていた。
 かの神はそれらを数多く彫り込んだ、そして優美さは全てに息づき、
 驚くべきものであり、声を発する生き物に似たものであった。

この部分には細かい本文の問題が多くあるが、本稿では特に 576-7 を取り上げる。この 2 行は、F. A. Wolf (*Theogonia Hesiodica*. Halle, 1783. 筆者未見) によって初めて改竄と判断された後、現在は、学術的校訂本ではない Schönberger のそれを除き、殆どの校訂本は、Wolf の判断に同意して、この 2 行を [] で囲っている。本稿では、この 2 行を、真正のものとして弁護することを試みたい。

1. Hes. Th. 576-7 が削除される理由

まず、一番最初に目につく問題は、576 では、明らかに花冠と思われる στεφάνους が女性の頭に巻かれた後に、578 では、金製のおそらく平たい板状の冠である στεφάνην が、同じ女性の頭につけられる、つまり、一人の女性に二つの冠がつけられることである。後から頭につけられる στεφάνη には、ヘーパイストスによって、様々な陸海の怪物が描かれるため、ある程度以上の大きさのように思われ、最初につけた花冠の意味は視覚的には余り意味が無いように一見思われる。しかも、ここでは「花冠」は στεφάνους と、複数形で現れており、花冠だけでも 2 つ以上あるように理解できる可能性がある。

次に、576 と 578 では、ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν... が全く同じで、これはあたかも改竄者が 578 に倣って 576 を作ったように思わせる現象である。

その上、576 の στεφάνους の語そのものにも問題がある。West は、花冠はヘーシオドスでは *Op.* 74-5 ἀμφὶ δὲ τήν γε | ὦραι καλλίκομοι στέφον ἄνθεσι εἰαρινοῖσιν. 「そして美しいホーラ達は、彼女の頭を春の花で巻いた」に唯一例があるのみとして、この行の真正を疑う根拠の一つとしているが、確かに、ホメロスでは花冠は出て来ない(ただし註 4 参照)。そもそも στέφανος の用例は、ホメロスでは一つしかなく、そこでは輪状のもの一般を指している(これについては後述 p.59)。そして、ヘーシオドスの *Op.* 74-5 では、花で巻いたと記しているだけで、花冠は何と呼ばれるのか明記されていない。στέφανος が明らかに花冠を意味する例は、サッポーラの時代にならなければ見出されない(後述 p.60 参照)。

冠に関わる問題以外では、West は、アテーナーが 573 で出て来た後に、再度 576-7 でも出てくるとも、弁護できないとしている。

以上が、校訂者たちが述べている 576-7 の問題であるが、さらにホメロスとの比較をすると、確かに 576 は 578 から二次的に作られたものではないかと思われる点が見出される。すなわち、*Il.* 10. 257 ≡ 10. 261 は、*Th.* 578 と多くの部分で共通している。

<i>Th.</i> 576	ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
577	ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη
578	ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην χρυσέην κεφαλῇφιν ἔθηκε,

<i>Il.</i> 10. 257	καὶ σάκος, ἀμφὶ δέ οἱ κυνέην κεφαλῇφιν ἔθηκε.
≡ <i>Il.</i> 10. 261	καὶ ξύφος, ἀμφὶ δέ οἱ κυνέην κεφαλῇφιν ἔθηκε.

そして盾(剣)を(貸し)、そして、彼の頭に兜を置いた。

これらの行の共通点を互いに比較するなら、*Th.* 578 は *Il.* 10. 257 と 261 を参考にして作られた可能性が高いといえるだろう。つまり、*Th.* 578 のほうは、イーリアスの例では第2脚にある ἀμφὶ δέ οἱ を冒頭に移動し、κυνέην を στεφάνην χρυσέην に変更し、κεφαλῆφιν ἔθηκε は行末にそのまま使われる、という具合によってである。一方、*Th.* 576 のほうは、このようにして作られた *Th.* 578 の前半を共有していることから、これは *Il.* 10. 257 から作られた *Th.* 578 から、さらに作られたと考えられる。

構文の点でも、*Th.* 576-7 のほうは、ややぎこちなさが感じられる。すなわち、νεοθηλέας の後、ἄνθεα ποίης の同格が続いた後に、στεφάνους にかかるべき ἱμερτοὺς が次の行にあらわれ、しかも asyndeton で続いているのである⁽¹⁾。

また、*Th.* 573-5 で、アテーネーがこの女性につける装身具は、技芸の女神であるアテーネーに相応しいが、576 の素朴な花冠とアテーネーとの特別なつながりは考えにくい。その後の 578 から、ヘーパイストスの技術を凝らした黄金の冠が出てくることを考えると、この印象はさらに強くなる。むしろ花冠を与えるのは、*Op.* 75 のように、ホーライが適当であろう。あるいは、誘惑的なものを意味する ἱμερτοὺς と、νεοθηλέας ἄνθεα ποίης から考えると、花冠を与えるものとして、アフロディーテーが考えられるかもしれない。

2. これまでの解決案

以上で見たように、*Th.* 576-7 は削除されるのが一般的である。

Solmsen のように、578-84 のヘーパイストスの頭飾りとその説明を全て削除して、少なくとも頭に2種類の冠をつけるのを回避する方法はあるが、上述のように、イーリアスの例との比較からは、一次的なのはむしろ 578 と考えられるため、こちらを削除すべきという判断には同意できない。また、多くの行を削除するという以上に、その絵の描写の暗示的な意味、つまり女性の性質を獣の描写で暗示しているという、意味深い部分を削り取ってしまうことになる。

576-7 を残すための意見は次のようなものがある。

Verdenius は、アテーネーが2度出てくるのは、類例がないことではないとしている。Verdenius は *Th.* 25, 29 κοῦραι Διὸς を引用しているが (ad loc.)、ヘーシオドスでは clausura が近くで繰り返される事は全く珍しいことではなく、アテーネーの繰り返しは、それ自体としては問題にはならないだろう。

同じ Verdenius は、West が主張した、花冠はホメーロスにはない、という論点

(1) ἄνθεα ποίης は、パピルス断片の伝える読み (West では Π¹³) であるが、写本の読みは ἄνθεσι ποίης を伝えている。写本の読みは確かにこのぎこちなさを緩和しはするが、ἄνθεα ποίης が *Od.* 9. 449 の clausura と一致すること、それから、このパピルス断片が他の場所でも、比較的良好な読みを回復している (例えば 582 の写本の πολλὰ は明らかにすぐ上の行の πολλὰ に影響されて誤写されたもので、このパピルスの δεινὰ が正しい読みであろう) を考えると、これが恐らく本来の読みであったと思われる。

に対し、Op. 75にある当の花冠がそのパラレルだと主張している。これは反論としては有効に見えるが、ヘーシオドスに、頭に花を巻くということがあったことの主張にはなるものの、στεφάνουςという言葉が「花冠」という意味でヘーシオドスに認められることを保証するものではない。つまり Verdenius の反論は、West の主張の半分にしかなっていない。

Fink は、複数の花冠 στεφάνους については、詩人は可能な限りの花環をかけて、美しくしようとした (T. Fink. *Pandora und Epimetheus*. Erlangen, 1958. 筆者未見。Verdenius ad loc. による引用を参照した) と主張する。もちろん、その可能性は否定できないが、これについては、Verdenius の引用によるかぎり、類例は挙げられていない。

特別な解釈で、問題を回避する方法も提案されている。Neitzel は、この箇所を書く時にヘーシオドスが参照したと思われる Il. 14. 178-85 を引き合いに出し、στεφάνους を耳飾りと解釈し、これによって頭に2種類の飾りが来る問題と、στεφάνους の複数の問題を回避しようとしている (Neitzel pp.24-5)。このイリアースの箇所では、女神が身繕いする様が描かれており、その中には確かに耳飾りをつけるところもある (182 ἐν δ' ἄρα ἔρματα ἤκεν εὐτρήτοισι λοβοῖσιν | τρίγλῃνα μορόεντα: 「そして、よく穿たれた耳たぶには耳輪が来る。それは光り輝く三重の輪」)。一方、ヘーシオドスの女性の原形の耳には、飾りはつけられていない。しかし、だからといって、στεφάνους がそれにあたると判断することは、飛躍があると言わざるを得ない。ここで出て来ているのは τρίγλῃνα μορόεντα という耳飾りを意味する全く別の語である。万一 στεφάνους が耳飾りを意味できたとしても、それが花によって出来ているというのは、やはり奇妙に思われる。

3. 二つの冠の存在について⁽²⁾

576-7 が削除される理由を見、それに対する反論を見た限りでは、今までのところ、この2行を保持する試みは、一部の削除の理由にしか、反論できていないようである。以下では、この二重の冠を弁護できる、今まで見過ごされて来た事実がないか、探っていく。

3.1. 美術資料

まず、二重の冠は、果たして奇妙であるかどうか。

完全な平行例になるわけではないが、ギリシアの美術資料などを見ると、頭に二重の飾りをつける例はないわけではない。

ピサの洞窟で発見された、紀元前 540 頃のものとして推定されている奉納のタブレッ

(2) この部分について、都立大学博士課程浜本裕美氏に、エウリピデースとピンダロスの例、ならびに、筆者未見であった絵画資料を紹介している Llewellyn-Jones、Oakley-Sinos の有用な研究書を紹介していただいた。また、残念ながら全ては本稿で反映できなかったが、貴重な御意見を下さった事に、多大な感謝をしたい。

トには、頭に恐らく巻布をした上に、木の枝でできた冠を被った女性が描かれている (Andronicos-Chatzidakis-Karageroghis, p.69)。

Athenian red-figure stamnos signed by Smikros as painter, last quarter of 6 BC, Musées Royaux d'Art et D'Histoire, Brussels (A 717) (Osborne, Plate 72) では、宴会で笛にあわせて唱おうとしている男性の頭に、明らかに飾り布が頭に巻かれた上に、花冠がかけられている。

もう少し後の時代になると、頭に巻布をして、オリーブの冠を被ると言う構図はストックとなっているようで、紀元前5世紀後半からはかなり多くの例が見られる⁽³⁾。たとえば Athenian red-figure vase by the Meidias Painter: Aphrodite and Phaon, Florence, National Museum (Boardman, Plate X 139) には、首飾りを持っている女性と、楽器を弾いている男性が描かれているが、その頭飾りを見ると、二重になっているのがわかる。ここでは男性と女性が、おそらく幅の広い飾り布を頭に巻いており、その布の周りから、葉が見えているのが見て取れる。女性のほうも、恐らく同じように布を巻いて、こちらも頭飾りの上の方に葉がでているのがわかる。宙を飛んでいる女神(ヒメロス)は、明らかに花冠を持っており、それはオリーブの実を付けている。男性のほうの布の周りには、このオリーブの実が見えていることから、花冠を巻いた上に飾り布(あるいは女性に関しては頭飾り)を巻いていると(おそらく女性も)考えられる。これは、順番からいうと、問題の箇所(2)の冠の順番に平行していると言える。

もう一つ、紀元前430年頃の製作になる、Staat. Mus., Berlin F 2372 では、花嫁が馬車の車駕に立っているが、この女性は頭にベールと、金属製と思しき冠を被っているが、さらにこれに女神が植物の冠をかぶせようとしている (Llewellyn-Jones, p.243, Fig. 158, または Oakley-Sinos p.90 Fig.72)。また、同様に、Athens, National Museum 1454 では、すでに頭に巻布を巻いた花嫁を別の女性が抱きかかえながら、恐らく金属製の髪飾りをかぶせようとしているが、同時にエロースがその上に植物の冠をかぶせようとしている (Oakley-Sinos p.66 Fig.28, 29)。

もちろん、これらの例は、ヘーシオドスの時代のものではなく、当然、改竄を行ったものが、これらの例にならって付け加えた可能性はなくはない。問題の2行が真正である根拠はこれ以外にも求めなければならないが、もし真正であれば、最後の2例が示しているように、このような複数の冠をつけることは、花嫁の飾り付けの際に、特に好んで行われたものではないだろうか。

3.2. 文学的資料

これも年代的にはヘーシオドスより下ることになるが、二重の冠と思われる箇所が2つ見い出される。

エウリーピデースの『エーレクトラー』では、使者がアイギストスがどのようにオレステースに殺されたのかを報告する場面があるが、その中で、アイギストスの殺害後、その張本人が、実は帰って来たオレステースであったことを家来達が認めて、一転歓喜することが報告されている。その際、報告者はオレステースに、彼ら

(3) 例えばシャルボノー・マルタン・ヴィラール pp.269 以下参照。

が頭の飾りを捧げたと言っている。

στέφουσι δ' εὐθὺς σοῦ κασιγνήτου κάρα
χαίροντες ἀλαλάζοντες ... (E. *El.* 854-5)
彼らは喜び声を上げて、すぐにあなたの弟の頭に冠を巻いた

その後で、エーレクトラーはこの報告に喜び、頭の飾りを彼の為にと取って来ようと言う。

φέρ', οἷα δὴ 'χω καὶ δόμοι κεύθουσί μου
κόμης ἀγάλματ' ἐξενέγκωμεν, φίλαι,
στέψω τ' ἀδελφοῦ κῶτα τοῦ νικηφόρου. (E. *El.* 870-2)
さあ、実に私が家に持ってしまったている
髪飾りを、我々は持って来ましょう、
そして勝利した弟の頭に巻くとしましょう。

つまり、オレステースは、まず家来たちに、飾り物を巻いて貰った上に、さらにエーレクトラーが持っていた飾り物を巻くことになる。前者の飾り物は花冠あるいは、勝利の印のオリーブや月桂樹の冠であろうが、後者はおそらく植物などから出来たものではなく、金属などの冠などであることは間違いないであろう。しかも、στεφάνους あるいは κόμης ἀγάλματ' ἐξενέγκωμεν とあり、どちらも複数である。つまり、もしこの複数を実際の複数にとるなら、頭に4つ以上の飾りがつけられることがここから読み取れる可能性もある。

ピンダロス『イストゥミア』第5歌の末尾では、詩人は、おそらくコロスに対して、競技の勝利者であるピュラキダースに、やはり2種類の頭の飾り、この場合は花冠と羊毛の巻布をつけるよう勧めている。

λάβανέ οἱ στέφανον, φέρε δ' εὖμαλλον μίτραν,
καὶ πτερόεντα νέον σύμπεμπον ὕμνον. (Pi. *I.* 5. 62-3)
彼のために花冠をとれ、そして、よき羊毛の巻き飾りを持って行け、
そして翼ある新しき賛歌を送れ。

以上の美術資料と、文献の例から、2つ(あるいはそれ以上)の頭飾りが同時に頭に置かれるということが、あり得たことを我々は確認できたと思う。もちろん、ヘーシオドスと同時代の資料がない以上、ヘーシオドスの時代に遡るものかどうかは、確定できないが。

4. ホメーロスとの整合性

語としての στέφανος が、ヘーシオドスでは、それ自体で、花冠を指しえたかど

うかは、先に述べたように、確証はない。年代設定には大いに問題のあるホメーロス讃歌を除くなら、花冠と思われるものを指すのに使われる *στέφανος* は、ヘーシオドスのこの箇所が唯一の例である。

しかし、ホメーロスでの用例と、矛盾しない形で、ヘーシオドスの問題の箇所では *στέφανους* を花冠と理解することは、できないことではない。

πάντη γάρ σε περὶ στέφανος πολέμοιο δέδηκε (Il. 13. 736)

実に一面お前の周りには戦いの輪が燃えている。

ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,

ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη (Hes. Th. 576-7)

そして、パッラス・アテーネーは草の花の愛らしい

青々とした巻き飾りを、彼女の頭の周りに巻き付けた。

ホメーロスにおいても、*στέφανος* はこれが唯一の用例だが、ここでは *στέφανος* *πολέμοιο* という表現から、*στέφανος* は、輪状のもの一般を指していると思われる、Janko も注釈ではそのように理解している (Janko ad Il. 13. 736-9)。それが *πολέμοιο* によって、どのような輪なのかの説明されていると解釈できるだろう。ヘーシオドスの問題の箇所も、*στέφανους* は輪であり、それが花で出来ていることを、*νεοθηλέας*, *ἄνθεα ποίης* が示していると考ええるならば、この箇所は特にホメーロスと異なった *στέφανος* の用例ではないと思われる⁽⁴⁾。

- (4) 実は、もし West が 576 の *στέφανους* で感じた問題を、578 の *στεφάνη* 自体に投げかけるならば、こちらもホメーロスとどれぐらい一致しているのか、慎重な考察が必要になるだろう。

ホメーロスでの *στεφάνη* は、実は殆ど全て、女性の頭の装飾具とは関係がなく、ヘルメットの縁、あるいはヘルメットそのもの (Il. 7. 12, 10. 30, 11. 96)、それから岩石の縁 (Il. 13. 736 おそらく比喩的用法) であり、唯一、女性につけられる頭の飾りとして使われるのは Il. 18. 597 だけである。

καὶ ῥ' αἱ μὲν καλὰς στεφάνας ἔχον, οἱ δὲ μαχαίρας
εἶχον χρυσείας ἐξ ἀργυρέων τελαμώνων. (Il. 18. 597-8)

στεφάνας] *στεφάνους* Z

そして、女達は美しい *στεφάνη* を持ち、男達は
銀の下げ緒から金の刀を下げて持っている。

これらはヘーパイストスが盾に描いたところの有名なエクフラシスの一場面、年頃の男女の相手探しの場面であるが、この2行を、文献学者アリストファネースは、婚礼に剣を持つのはおかしいとして、改竄と見ている。この部分については行の真正を疑われることはないため、現在の研究者は、アリストファネースの見解にほとんど与することはないが、*στεφάνας* についていえば、ヘルメットの縁としてではなく、女性の飾りについて言われているのは、少なくともホメーロスでは例外的である。

女性の *στεφάνη* が金属の頭飾りを意味する例として、West が挙げている、このホメーロスの例以外のもう一つの例は、*h. Hom.* 6. 7 (短いほうのアフロディーテ讃歌) *κρατὶ δ' ἐπ' ἀθανάτῳ στεφάνην εὐτυχτον ἔθηκαν | καρὴν χρυσεῖην* である。しかし、これをホメーロス、ヘーシオドスと同格にみなすのは極めて危険である。この短いアフロディーテ讃歌の前にある、*h. Ven.* は古典期にまで成立時代が下る可能性が高いと思われるが (cf. 泰田伊知郎「中世写本の総祖本に認めうる詩行の文献学的処置

στεφάνουςの複数については、上述のエウリーピデースの例とともに、本来の複数であるかどうかというのは問題ではあるが、おそらく poetic plural であると考える問題はないだろう。時代が下るが、紀元前6世紀頃にはサッポーに(すでに στέφανος を独立して花冠として使っている箇所ではあるが)同様の poetic plural の例が見つかる。

σὺ δὲ στεφάνους, ὦ Δίκα, πέρθεσθ' ἐράτοις φόβαισιν
ὄρπακας ἀνήτω συναέρραισ' ἀπάλαισι χέρσιν.

(Sapph. 81 Lobel-Page, 78 Bergk, 80 Diehl)

だが、貴女は、おおディカ、髪に愛らしい花冠を巻きなさい
ういきょうの枝を柔らかい手で撚りなさい。

ここでは、このういきょうの枝を撚ったものが στεφάνους で、それを頭に巻くことが意味されているが、この場合には στεφάνους が実際の複数であると考えする必要はないだろう。サッポーの例での複数は、恐らく複数の撚りあわせられる枝のイメージによるものでもあろうが、もっと直接的な理由としては、ここに韻律上ロングが要求される事によると思われる。

5. 残された問題

以上で、複数の頭飾りが同時に頭にあることが、少なくとも不可能ではないということ、美術資料と文献資料の観点から検討し、さらに、στεφάνους は輪であって、それに続く νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης によって、ホメーロスでの用法と食い違うことなく、花冠となるのではないか、という解釈の可能性を提示した。

しかしながら、実際に複数の冠がかぶせられるとしても、まだ次のような問題が残されている。先に見たように (p.54)、576-7 は恐らく二次的に作られた句である。その際、全く同じ前半部で、しかもぎこちなさを伴うような状態のものをあえて作り、残したのか不明である。また、なぜ技芸の女神アテーナーが、素朴な野の花の冠を作るのか、という問題 (p.55) もある。わざわざ、ヘーシオドス自身が、この2行を書き足す必然性が、頭に複数の頭飾りを置きたい、という以上にあったのだろうか。

こういった問題が起こっていることこそが、実は 576-7 がここに真正のものとし

について—*h. Ven.* 136-136a 行目を題材に—『西洋古典学研究』54 (2006) 14-26)が、*h. Hom.* 6 も、決して古い状態にまでは遡るものではない可能性が高いだろう。ここでは深くは立ち入らないが、年代特定の指標となるのは、ἐδεξιόωντο (16) で、一見ホメーロス風の形をしてはいるが、δεξιόω という語は、この1例を除き、初期叙事詩には登場せず、古典期以降にのみ見られる。

もし *h. Hom.* 6 が平行例として相応しくないとすれば、*Il.* 18. 597 は、女性の頭につけられる στεφάνη の孤立した用例となり、そこでの恋人選びという場面を考えると、*Il.* 18. 597 の στεφάνας を花冠ととる可能性も否定できない(松平 ad loc. においても、花冠と訳されている)。

て書かれた理由なのではないかと、筆者は考える。

既に指摘されていることだが、ヘーシオドスには独特の作詩技法が観察される。それは、語句や内容の繰り返しを用いた技法で、特にその中には、シンメトリーをつくり出す技法が顕著に見られる。問題の箇所の前後は、以下のように分析できるだろう。

αὐτίκα δ' ἀντὶ πυρὸς τεῦξεν κακὸν ἀνθρώποισι· 570
 γαίης γὰρ σύμπλασσε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
 παρθένῳ αἰδοίῃ Ἴκελον Κρονίδεω διὰ βουλᾶς·
 ζῶσε δὲ καὶ κόσμησε θεὰ γλαυκῶπις Ἀθήνη
 ἀργυφὴ ἐσθῆτι· κατὰ κρήθεν δὲ καλύπτρην
 δαιδαλέην χεῖρεσσι κατέσχεθε, θαῦμα ἰδέσθαι· 575
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους νεοθηλέας, ἄνθεα ποίης,
 ἱμερτοὺς παρέθηκε καρήατι Παλλὰς Ἀθήνη·
ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην χρυσὴν κεφαλῆφιν ἔθηκε,
 τὴν αὐτὸς ποίησε περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις
 ἀσκῆσας παλάμησι, χαριζόμενος Διὶ πατρί. 580
 τῇ δ' εἴη δαίδαλα πολλὰ τετεύχατο, θαῦμα ἰδέσθαι,
 κινῶδαι' ὅσ' ἤπειρος δεινὰ τρέφει ἡδὲ θάλασσα·
 τῶν ὃ γε πόλλ' ἐνέθηκε, χάρις δ' ἐπὶ πᾶσιν ἄητο,
 θαυμάσια, ζωοῖσιν ἐοικότα φωνήεσσιν. (Hes. *Th.* 570-84)

570-84 の、禍としての女性を作る場面の中で、576 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνους ... と、578 ἀμφὶ δέ οἱ στεφάνην ... は、ちょうどこの段落の中央に来る。つまり、576-8 の3行の前後は、ちょうど6行ずつある。

West が問題視していた Ἀθήνη の繰り返しは 573/77 だが、その周りに、571/579 で、1 行ずつ間を置きながら、περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις が 573/77 を取り囲んで、これも行末で繰り返されている。さらに、573/577 の Ἀθήνη の繰り返しは、ちょうどアテーネー女神の女性の飾り付けの行の始めの行と終わりの行に対応している⁽⁵⁾。さらに、このシンメトリーを縫うような形で、θαῦμα ἰδέσθαι が2つの Ἀθήνη にはさまれた真中に、つまり両方から1行ずつ置いた行である575にきた後に、最後の περικλυτὸς Ἀμφιγυήεις から1行ずつ置いた後に現れている。

これらのことを考えると、ἀμφὶ δέ οἱ στεφάν... の行頭での繰り返しと、行末の Ἀθήνη の繰り返しは、単なる偶然や稚拙な表現ではなく、シンメトリーを利用した図形的な語句の対応をつくり出すための繰り返しであったと考えられるのではないだろうか。

(5) ちなみに、578 行の、ヘーパისტスの飾りを頭につけるのがどちらの神かも、些細な事だが、例えば Evelyn-White ではアテーネー、Schönberger ではヘーパIST と取っており、翻訳者によって異なっている。もしこの Ἀθήνη の繰り返しとその仕事の始めと終わりという意識を詩人が持っていたとすれば、578 はヘーパIST が頭に飾りをつけることになると解釈できる。579 の αὐτός もこの解釈を支持するだろう。

このようなシンメトリーは、ここだけで見るなら、偶然に見えるかもしれないが、ヘーシオドスには他にもシンメトリーを意図して書かれたと思われる部分が幾つかある。

Schwabl は、617-724 のティターン族との戦いについての、これらの繰り返しの詳細に分析する論文を書いている。その論文の冒頭 (Schwabl pp.176-8) で、例としてあげている 31-42 のシンメトリーの Schwabl の理解をまとめると、以下のようになる⁽⁶⁾。

ὥς ἔφασαν κοῦραι μεγάλου Διὸς ἀρτιέπεται,
καί μοι σκῆπτρον ἔδον δάφνης ἐριθηλέος ὄζον 30
δρέψασαι, θηητόν· ἐνέπνευσαν δέ μοι αὐδὴν
θέσπιν, ἵνα κλείοιμι τά τ' ἐσσόμενα πρὸ τ' ἐόντα,
καί μ' ἐκέλονθ' ὑμνεῖν μακάρων γένος αἰὲν ἐόντων,
σφᾶς δ' αὐτὰς πρῶτόν τε καὶ ὕστατον αἰὲν αἰεῖδεν.
ἀλλὰ τίη μοι ταῦτα περὶ δρῦν ἢ περὶ πέτρην; 35
τύνη, Μουσᾶων ἀρχώμεθα, ταὶ Διὶ πατρὶ
ὑμνεῦσαι τέρπουσι μέγαν νόον ἐντὸς Ὀλύμπου,
εἵρουσαι τά τ' ἐόντα τά τ' ἐσσόμενα πρὸ τ' ἐόντα,
φωνῇ ὀμηροῦσαι τῶν δ' ἀκαμάτος ῥέει αὐδὴ
ἐκ στομάτων ἠδεῖα· κτλ. 40

このように、偉大なゼウスの、言葉に長けた娘達は言った。
そして、私によく茂った月桂樹の枝を折って杖として下さった、 30
素晴らしい枝を。そして、私に神の声を吹き込まれた、
これからある事と、これから起る事も讃えるように、
そして私に常世にいます至福の者の種族を歌うように促した、
そして、最初と最後に彼女ら自身を常に歌うように、と。
だが、なぜ私に樅や岩についての事を語る必要があるだろうか。 35
さて、ムーサから私は始めよう、彼女らは父たるゼウスを
歌って喜ばせる、オリュンポスにおわすその神の偉大な心を。
今ある事もこれからある事も以前あった事も
声をあわせて讃え歌って、そして彼女らの疲れを知らぬ声は流れ出る、
その口より甘美に。…… 40

ここでは、完全な行の一致は 32 と 38 にあり、他は部分的・内容的一致である。すなわち、32-34 の行末では、33 とその前後の行の部分的一致、34 と 36 の行頭では「始まり」の意味の上の一致、33 と 37 では ὑμνεῖν の動詞の一致、37-39 では、より漠然とした「語る」ないし「歌う」という動詞の一致である。

(6) ただし、Schwabl は、問題の Th. 576-7 については、彼の構造の分析 (Hesiods *Theogonie: Eine unitarische Analyse*. Wien, 1966) から、削除を提案しているようである。この論文については筆者未見、筆者は Neitzel p.23, pp.26-7 から知った。

429-36 では、語句の一致によるシンメトリーが明確に観察される。これについては、West が既に指摘しているところである⁽⁷⁾。

ῥ' δ' ἐθέλη, μέγας <u>παραγίνεται ἡδ' ὀνίνησιν</u>	429
ἐν τε δίκη βασιλεῦσι παρ' αἰδοίοισι καθίζει,	434
ἐν τ' ἀγορῇ λαοῖσι μεταπρέπει, ὃν κ' ἐθέλησιν	430
ἡ δ' ὁπότ' ἐς πόλεμον φθισήνορα θωρήσσονται	
άνερες, ἔνθα θεὰ παραγίνεται, οἷς κ' ἐθέλησι	
νίκην προφρονέως ὁπάσαι καὶ κῦδος ὀρέξαι.	433
ἐσθλή δ' ἱππῆεσσι παρεστάμεν, οἷς κ' ἐθέλησιν	439
ἐσθλή δ' αὖθ' ὁπότ' ἄνδρες ἀθλεύουσ' ἐν ἀγῶνι	435
ἐνθα θεὰ καὶ τοῖς <u>παραγίνεται ἡδ' ὀνίνησι</u>	436

だが、彼女（ヘカテー）が望む者には、彼女は側に立ち助力をする。	429
裁判の時にも、畏るべき貴族の側に座り、	434
集会場でも、その者は人々の中で目立つのだ、彼女が望むものは。	430
あるいは、男達人が人を滅ぼす戦に向けて武装する時、	
その時、その女神も、助力をする、彼女が	
勝利を喜んで与え、誉れを与えることを望むものには。	433
騎手にとっても、彼女は優れて助力をする、彼女が望むものには。	439
人々が競技で力を尽くす時にも、彼女は優れている、	435
その時、その女神はまた彼らの側に立ち助力をする。	436

429 と 436 によって囲まれたこの部分の中では、434 と 430 の行頭の ἐν τ'、439 と 435 の行頭の ἐσθλή δ'、そして、430、432、434 の行末の κ' ἐθέλησιν が、完全なシンメトリーになっている。この箇所では、ヘーシオドスがシンメトリーの構造を意図的に使ったことは明らかだろう。

もう一つ、問題の箇所にとって重要な語句の対応がある。これは実は同じプロメーテウスの逸話の中で、問題の箇所の少し前の 540-61 に出てくるものである。

τῷ μὲν γὰρ σάρκας τε καὶ ἔγκατα πίονα <u>δημῷ</u>	
ἐν ρίνῳ <u>κατέθηκε, καλύψας</u> γαστρὶ βοείη.	
τῷ ⁽⁸⁾ δ' αὖτ' <u>ὅστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ</u> (a)	540

- (7) この箇所の、行の移動は殆ど確実だと思われる。West が言うように、434 は、写本の位置では、武装の時のヘカテーの助力の後に、内容的に無関係に登場するが、430 の前では、内容の点でもアナフォラの点でも相応しい。439 のほうも同様だが、この場合は、435 は 439 の後でなければ、ἐσθλήの内容である παρέσταμεν を欠くことになる。その他の行の移動の根拠については、West の該当箇所を参照。
- (8) 写本の読みのままを採用する。West はこの 540 の τῷ は、「人間たち」でなければならないとして、複数の τοῖς にしている。また、West 以前は、多くの校訂者らは、538 の τῷ のほうを「人間たち」とすべきとして、τοῖς に変えて読んでいた（この判断は、U 写本に見られる行の上の書き込み οἷς にも恐らく影響されていたと考えられる）。どちらの処置も、プロメーテウスが肉を取り分ける相手の一方をゼウス (τῷ)

εὐθετίσας κατέθηκε, καλύψας ἀργέτι δημῶ.

δὴ τότε μιν προσέειπε πατὴρ ἀνδρῶν τε θεῶν τε·

“Ἰαπετιονίδη, πάντων ἀριδείκετ' ἀνάκτων,

ὦ πέπον, ὥς ἑτεροζήλως διεδάσσαι μοίρας.”

ὥς φάτο κερτομέων Ζεὺς ἄφθιτα μῆδεα εἰδώς· (b)

545

τὸν δ' αὖτε προσέειπε Προμηθεὺς ἀγκυλομήτης,

ἦκ' ἐπιμειδήσας, δολίης δ' οὐ λήθετο τέχνης.

“Ζεῦ κύδιστε μέγιστε θεῶν αἰειγενετῶν,

τῶν δ' ἔλεν ὅπποτέρην· σε ἐνὶ φρεσὶ θυμὸς ἀνώγει.”

φῆ ῥα δολοφρονέων· Ζεὺς δ' ἄφθιτα μῆδεα εἰδώς (b')

550

γνῶ ῥ' οὐδ' ἠγνοίησε δόλον· κακὰ δ' ὅσσοιο θυμῷ

θνητοῖς ἀνθρώποισι, τὰ καὶ τελέεσθαι ἔμελλε.

χερσὶ δ' ὃ γ' ἀμφοτέρῃσι ἀνείλετο λευκὸν ἄλειφαρ,

χώσατο δὲ φρένας ἀμφί, χόλος δέ μιν ἔκετο θυμόν,

ὥς ἶδεν ὅστέα λευκὰ βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ. (a')

555

ἐκ τοῦ δ' ἀθανάτοισιν ἐπὶ χθονὶ φῦλ' ἀνθρώπων

καίουσ' ὅστέα λευκὰ θηέντων ἐπὶ βωμῶν.

τὸν δὲ μέγ' ὀχθήσας προσέφη νεφεληγερέτα Ζεὺς·

“Ἰαπετιονίδη, πάντων πέρι μῆδεα εἰδώς,

ὦ πέπον, οὐκ ἄρα πω δολίης ἐπελήθεο τέχνης.”

560

ὥς φάτο χυόμενος Ζεὺς ἄφθιτα μῆδεα εἰδώς.

というのも、一方には肉と脂肪で油ののった内臓を皮に包み、牛の胃袋に隠して置いた。

だがまた一方には、策略の技をもちいて、牛の白い骨を、
白光りする脂肪に隠して立たせて置いた。

540

まさにその時、彼に人々と神々の父は言った。

「イーアペトスの子よ、全ての主人に優るものよ、
わが友よ、なんと不公平に取り分をわけたことか」

このように、彼をいなしつつ、尽きる事ない謀知るゼウスは言った。 545

彼に答えて、策に長けたプロメーテウスは言った、

軽く笑いながら、だが策略の技を忘れずに。

「最も名高いゼウスよ、常世の神々のうち最も偉大な者よ、

だがこれらのうちどちらか、あなたに心の中で気持ちが命ずるものを取り給え」

実に彼は策を弄しつつ言った。だが尽きる事ない謀知るゼウスは 550

その企みを認め、見抜かずにはいなかった。そして、心に人々への

禍を謀ったが、それはまた成し遂げられる運命であった。

とし、一方を人間達 (τοῖς) とするためのものである。しかし、本稿がここで主張するように、もしヘーシオドスが文法的な完全性よりも、対称性を優先する傾向があると考えるなら、ここでも恐らく 538 と 540 の τῷ の繰り返し、そして 539 と 541 の κατέθηκε, καλύψας の繰り返しの対称性が意図されていると思われ、538 と 539 は、写本の読み τῷ のままにすべきだと考える。

そして、彼は両の手で白い脂肪を取り上げ、
 胸の中で怒った、そして怒りは彼の心に達した。
 策略の技をもちいて（隠された）牛の白い骨を見た時に。 555
 そしてその時以来、地上で人々の種族は不死なる神々の為に
 白い骨を香しき祭壇で焼くのである。
 彼に、雲集めるゼウスは大いに気分を害して言った。
 「イーアペトスの子よ、尽きる事ない謀に長けた者よ、
 わが友よ、実に全く策略の技を忘れずにいたものだ」 560
 このように怒りつつだが尽きる事ない謀知るゼウスは言った。

この部分では、繰り返しを利用した図形的な語句の配置が3つ確認される。つまり、538-541の中、543-5と559-61、そして540/555 (a, a')と545/550 (b, b')のシンメトリーであるが、特に注意したいのは、最後のそれである。上の引用中で、二重の実線と波線で強調したように、540/555 ὅστέα λευκά βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ は、545/550 Ζεὺς ἄφθιτα μῆδεα εἰδῶς の外側にあつて、540, 545, 550, 555 はそれぞれ5行置きに現れていることが観察される。ここで注目されるのは、555のὡς ἴδεν ὅστέα λευκά βοὸς δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ である。この部分は、「策略の技を用いて（隠された）牛の白い骨を見た時に」となるが、繰り返しの一部である δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ は、文法的には浮いてしまっている。つまり、この前置詞句には、関係する動詞的な要素が必要になる（翻訳では「隠された」を補った）。Westもこの「埋め草」については、注釈で認識している (West ad loc.) が、どうしてこのような文法的に帰属が曖昧な語句まで繰り返したのか、理由は述べていない。しかし、上で見たように、ヘーシオドスの、語句の繰り返しの図形的な配置、特にシンメトリーをつくり出す傾向が幾つか観察されるところを見るなら、これはヘーシオドスが、この部分でシンメトリーをつくり出すために、あえて文法的に曖昧なまま、δολίῃ ἐπὶ τέχνῃ を繰り返したと考えられる。

もし、555で、ヘーシオドスがあえて文法を犠牲にしながらシンメトリーを優先させたとすれば、問題の576-7が、先に指摘したように、二次的に作られたもののようでもあり、そこに、構文のぎこちなさや、またアテーネーの花冠のやや不自然なことが観察されても、それはシンメトリーをつくり出すためにあえて許容した代償であったと考えるべきで、後世の挿入と考える必要はないのではないか、と思われる。

参考文献

本文中では、太字で示した以下の略号が用いられている。

校訂本・注釈・翻訳

Evelyn-White: Hugh H. Evelyn-White ed. and trans. *Hesiod, the Homeric Hymns and Homerica*. Loeb C. L. Cambridge Mass.: Harvard U. P.;

- London: Heinemann, 1914. Reprint 1977.
- Rzach:** A. Rzach ed. *Hesiodus Carmina*. 3rd ed. Bibliotheca Teubneriana. Stuttgart: Teubner, 1958.
- Janko:** Richard Janko. *The Iliad: A Commentary*. Vol.IV: Books 13-16. Cambridge: Cambridge U.P., 1992.
- Solmsen:** Friedrich Solmsen ed. *Hesiodi Theogonia, Opera et dies, Scutum*. R. Merkelbach et M. L. West. *Fragmenta selecta*. OCT. Oxford: Clarendon Press, 1970.
- West:** M. L. West ed. *Hesiod, Theogony*. Oxford: Clarendon Press, 1966. Special edition Sandpiper, 1997.
- 松平：松平千秋訳『ホメロス：イリアス（下）』岩波文庫．東京：岩波書店，1992．

美術資料

- Andronicos-Chatzidakis-Karageorghis:** Manolis Andronicos and Manolis Chatzidakis and Vassos Karageroghis. *The Greek Museums*. Athens: Ekdotike Athenon S. A., 1975.
- Boardman:** John Boardman. *The Oxford history of classical art*. New York: Oxford U. P., 1993.
- Llewellyn-Jones:** Lloyd Llewellyn-Jones. *Aphrodite as Tortoise: The Veiled Woman of Ancient Greece*. Swansea: The Classical Press of Wales, 2003.
- Oakley-Sinos:** John H. Oakley and Rebecca H. Sinos. *The Wedding in Ancient Athens*. Wisconsin Studies in Classics. Wisconsin: U. of Wisconsin P., 1993.
- Osborne:** Robin Osborne. *Archaic and classical Greek art*. Oxford history of art. Oxford and New York: Oxford U. P., 1998.
- Reilley:** Joan Reilley. "Many Brides: "Mistress and Maid" on Athenian Lekythoi." *Hesperia* 58 (1989): 411-4, Plates 73-81.
- シャルボノー - マルタン - ヴィラルール：ジャン・シャルボノー，ロラン・マルタン，フランソワ・ヴィラルール著 村田数之亮訳『ギリシア・クラシック美術（前480-前330）』東京：新潮社，1973．

その他

- Neitzel:** Heinz Neitzel. *Homer-Rezeption bei Hesiod: Interpretation ausgewählter Passagen*. Abhandlungen zur Kunst-, Musik-, und Literaturwissenschaft 189. Bonn: Bouvier Verlag, 1975.
- Schwabl:** Hans Schwabl. "Beispiele zur poetischen Technik des Hesiod." Ernst Heitsch ed. *Hesiod. Wege der Forschung* 44. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966.
- Verdenius:** W. J. Verdenius. "Hesiod, *Theogony* 507-616: Some Comments on a Commentary." *Mnemosyne* 4th ser. 24 (1971): 1-10.

(北海道大学)